史料室だより No. 14
東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1981年12月8日

別科　－海外帰国子女の教育－

秋山はる先生の話

私は寄宿の時からいたんです。明治40年代に学校に入り、英和に33年いました。教師として25年間勤めました。そのうち別科が10年でした。

－別科は新しい建物が出来てから出来ましたの？

別科は昭和９年に出来て19年４月に終ったの。ですから、丸10年いたしました。

－どういういきさつで始まりましたか？

それはね、私にも相談がなかったの。ミス・ハミルトンが一番初めの考えだろうと思うんです。それで、ミス・ハミルトンが小学科主任の樫村先生と相談なさって、スペシャルを作ろうとなさったらしいんです。作れば、あれはどうしても小学部から始めなくちゃいけない。で、小学科で英語が解って、小学校が教えられるのはまあ他になくて私だったんですね。

－先生は小学科では英語を教えていらっしゃいましたの？

私ね、学校を卒業するとね、方々のクラスを教えさせられたんです。ミス・クレーグの時代でした。それがすごく嫌だったの。女学校の３年か４年位まで１時間ずつ出ていたの。小学校の２年と６年、それから女学校の１年から４年位まで。ミス・クレーグの所へ嫌だって言いに行ったんです。「先生、私はちっちゃい子どもが好きですから、小学校の２年か３年の受持にさして下さい」って。そしたら先生が２年の受持にして下さったんです。それからずっと２年３年を教えるようになったの。だけど、writing だの translation だのを女学科に教えたりしました。それからhymn class

秋山はる先生

って言う、讃美歌の音楽でなくて、詩とか内容とか歴史を女学科に教えたりして。だから長岡輝さん、ああいう人達も教えたんです。

或る時、ミス・ハミルトンがスペシャルのクラスを作るから貴女しろとおっしゃった。「いやです」と言ったんです。私はミス・ブラックモアにでもいやですとはっきり言うんです。そしたら、ミス・ハミルトンが嫌だと言っても貴女より他に頼む人はないからやってくれっておっしゃったから、どうしても嫌ですって言ったら、じゃ１週間考えてくれ、ってこうおっしゃったの。１週間なんて考えないうちに嫌だって言ってやろうと思っていたんです。所がね、１週間経たないうちに、教員会で「秋山さんがやります」って発表しちゃったの。くやしくってミス・ハミルトンの部屋に怒鳴りこんで行ったんです。そしたらね、もう、どうぞやってくれって頭下げられてしまったの。ほかに頼む人はないんだって、こうおっしゃったのね。それがね、教え方がわかっていて、それ迄にそういう子どものクラスが今迄にあって、経験のあるほかの人のしたことでも見ているクラスな

らね、私もどうにかやり方がわかりますからね。嫌だと言っても仕方がないと思ってやるかもしれないけど、実際いやだったの。それに外国帰りの子供は無作法で、乱暴で、手に負えない所があるんです。皆の前で発表されたから、困ったけど仕方がない。４月になって幾人子どもが集まるかしらんと思ったんです。４月の開校式の時、15人集まりました。樫村先生と相談して、小学部の二階にピンポン室があったの。そこに大きなテーブルを二つ置きましてね、15人を入れて、一人一人日本語を話してみたの。試験して書かしたりする事はとても出来ません。話し方によってグループに分けたの。たしか五つのグループに分けました。

―どんな人がいたか先生名前を覚えていらっしゃいますか？

ええ覚えています。帳面がありますから持って来ましょう。（別科に入った生徒全員の名簿が残してあった。）

別科が出来て２、３年あとに早稲田に国際学院が出来たの。これが別科みたいに外国帰りの二世或は小さい時から外国で過した人たちを集めていました。それから恵泉に出来ました。恵泉の先生が私のクラスに参観にいらっしゃってお作りになりましてね、英和で困るようなことがあったら、生徒を廻して下さいとおっしゃいましたので、とても無理だなと思うような生徒はよそにまわしました。出来の少し悪いのを女学科に入れますとね、あとの生徒に影響するんです。別科から来たのは出来が悪いから、生徒は試験を受けなくちゃいけないとか何とか言われると、他の子供が可哀そうなんです。それですから、親がどんなに頼んでも、可哀そうだと思っても女学科へはなかなか入れませんでした。女学校の先生の中には別科をよく思わない方もいらっしゃいました。

丸10年しましたうちで、別科の生徒は全部で185名です。そのうち、外国人が５、６名居りました。満洲人が５人、オランダが１人、それともう１人シャム、今はタイと言いますね。だから７人入りました。

女学科へどうしても入れられないような知能で、他へ移るのは嫌だっていう時は、３年間以上別科に居れば、別科卒業っていうのにさせたんです。そんな人は沢山居りません。大抵ね、アメリカから日本へ寄越したりすると、日本の免状が欲しいんですよ。それは結婚の条件になるかもしれない。日本へ行って、日本の学校を卒業して来たというので良い条件になるらしいです。だから皆女学校へ入りたがったんです。よく出来る生徒でも、女学校へ行かないで、又外国へ帰りたいという人もありました。

外国から来たのは、シンガポールでしょ、それからオーストラリヤ、インド、タイ、それがまあこちらに近い方ですね。アフリカはケープタウンだのアレキサンドリアですね。それから欧州の方になりますと、イタリーは確か無かったですけど、パリ、ウィーン、ベルリン、英国はロンドンが主ですけど、もう１ケ所どこだったか忘れましたが、英国もちょっと多かったですね。あとは南米ね、南米は２ケ所ぐらい。まあ主に来たのはアメリカですね、それからハワイが多いです。あとはカナダ。カナダはトロントだのモントリオールだの、バンクーバーが多いですね。アメリカは東のニューヨークの方と、ロサンゼルス、サンフランシスコの西海岸。真中からも来てますけどね。ともかく世界中といっていい位でした。

―別科に入った生徒は一人一人違うわけですが、どんな授業をなさいましたか？

別科の生徒は、年の若いのは違いますけど、向うでハイスクール出たり、ジュニア、ハイの１年２年やったなんていうのはね、知能は割とあるの。算数の方は割と出来てます。ただ出来ないのは国語ね。ですから国語に力を入れたの。普通のクラ

別科生昭和９年ミス・リースと秋山先生

スだと１週５時間位でしょ。それを11時間入れたんです。英和は土曜日がお休みですから、１日に２時間ずつですね。１時間が40分ですから、80分。それをＡクラスとＢクラスに分けたのね。はじめは皆Ｂクラスですけれど、Ｂクラスで小学部をさせてしまうと、今度はＡクラスで女学科のものをさせました。何故かというと、年が17や18で女学校の１年には入れられないんですね。だから例えば、３年か４年位に入れて。たった１年で英和卒業っていうのは困ると言われて、なる程と思ったものだから、最高で４年にしたんです。それでＡクラスを作って、女学科の先生に女学校の１年、２年位のものをして頂いたんですね。出来る生徒は１年間に３年、４年の国語の勉強をやるんです。ある人は９月から３月迄の間に７冊から８冊の読本をあげました。１冊あげてしまうと私にテストしてくれって言うんです。テストしていいとなると上の巻へ進ませます。だから私はすごく忙がしかった。一人一人が違いますからね。一人一人の努力も違います。頭も違いますでしょ。大して努力しないでも出来る子はどんどん出来る。１年に４冊勉強する生徒があるかと思えば７冊するのもいる。かと思うと２冊出来ないのもいる。日本語教えるのに英語で答えるんですよ。ですからとてもね、英語の出来ない人では教えられません。

ーお教えになる時は、日本語ですね？

私は勿論日本語。英語で教えちゃ駄目ですね。ですけど答は英語で、それで何でも向うは英語ですね。夏休みなんか手紙よこしても、先生、英語ですぐ返事くれって言う。返事は英語で書かなくっちゃいけないの。どっちかって言うと、日本語で書いた方がためになるだろうとは思うんですけど、読めなきゃどうにも仕方がない。

ーリーダーは何をお使いになりましたか？

リーダーなんていうのはないんですよ。みんな学校の普通の読本。国定教科書を使いました。年令に関係なく、18才でも２の巻から始めたんです。

ー上・下ってありましたね。

６年までで、１巻から12巻までありました。２の巻から始めて、忽ち１と月で終ってしまう子もいました。

ー別科の生徒は先生が国語をお教えになりますね。他の授業は何をしていたんですか？

他の授業はね、例えば手芸みたいなものは関先生（図工科）が教えるとか、算数は樫村先生。私が教えたのは国語でしょ、それからお習字。歴史はね、荒木先生が教えて下さったの。私が荒木先生に「みんなよく勉強していますか？」って言うと「よく勉強しますよ」って言うから、クラスに行って「あなたたち歴史の時間によく勉強するそうね」って言ったら、「先生ちがいます。話がよく解んないから、みんな英語の本読んでます。こういう風にちょいちょい下向いてね、下でもって英語の本読んでます。」って言うから、「それじゃ今日持ってる本、机の上にみんな出しなさい」って言ったらこんなに（50～60センチ位）集ったのを教員室へ持ってきてしばらく置いといたの。荒木先生にはひと言も言わなかった。生徒を悪く思われると困ると思って。だけど私にはよくわかるのね。英和はどの学級にもライブラリーの時間って言うのがありましたからね。ライブラリーの時間、時々私は見に行きました。その時は好きに

入学後一学期位は制服が着られなかった

自由のものを読ませるけど、なるべく日本のものを読むようにさせたの。それから私、お話の時間ていうのをとってあったんですよ。お話の時間はね、日本語の本でも英語の本でも読んでね、それを日本語で話す。皆が聞いてて批評するのね。あすこはおかしかった。ここはこうした方がいいって言うような批評をするの。ある時鶴来先生（国語科）がそれを参観に来たことがありますよ。だから、私が教えたのは国語と習字とお話と聖書、それ位だったでしょうね。

ー礼拝の時間なんかは？

小学科と一緒でした。すべて小学科と行動を一緒にしました。何故かって言うとね、習う勉強がAクラスは国語は女学科のものをしますけど、あとは大抵小学科の方にいますからね。だから、礼拝も小学科、修学旅行も小学科と一緒です。修学旅行で関西なんかにも行きましたしね、箱根、日光なんかも行きました。

大事なことはね、向うで育った子は日本を嫌いじゃないんですけど、日本よりアメリカの方がいいっていう風に思う。日本を一段低く見るっていうのかしら。例えば、日本の国旗を見ても何も感じないで、アメリカの国旗を見ると何となくなつかしい。そういう気持を持ってちゃ可哀そうだと思ったんです。日本の子どもでありながら、日本人らしい気持を持たないのは。アメリカから帰ってきたのにどぶが汚い、蚊がいる、蚤がいるといって自分の国を悪く思う事は不幸だって思ったんです。だからなるべく日本のきれいなものを見せいい所を見せ、偉い所を見せて、日本はいい所であり、自分の国はいい国であるという風に思わせようと、そういうことには努めました。週に1回位、よそへ連れて歩きました。

ー別科は初めに15人っておっしゃいましたね？

ええ、4月に15人だったのにね、5月になったら又5人入ったんです。すぐ20人になってね、部屋の都合、いろんなことの都合上20人を定員としました。それ以上は入れないでいたんですけど、要求が多くて、希望者が多くて、仕方なく32人か35人ぐらいまでとりました。

ー一番初めはどうやって知らせたんですか？募集はどうしましたか？

募集は私は知らないんですけどね。何か外国の新聞だか何かに出たそうですよ。何の新聞か知りませんけど、日本の新聞には出てないけど。そんなこと誰かからちょいと聞きました。だからミスハミルトンか樫村先生がお出しになったか、二人が相談してお出しになったんでしょうよ。でね、初めは学齢に達した子どもを入れたんですよ。例えば沢田恵美ちゃんね。沢田美喜さんの娘さん。恵美ちゃんは8才で私のクラスへ入ったの。あの人はロンドンからパリへ来て、パリから私の所へ来たのね。だから沢田美喜さん、私の所へ何度も来ましたよ。私が先生の為にするんだから、先生は私の連れて来た人を皆入れてくれなくちゃ困るとか何とか言ってね。ちっちゃい子は可愛くていいんですよ。だけど別科っていうのは一人一人に手がかかるのね。小さい子どもにあんまり独占されると、他の子どもによく出来ないの。それで途中から10才に変えました。

ー別科を終って、この子は何年に入るというのは、全て先生がお決めになったんですね？

ええ、全て私が。決めるのはね、知能、健康、それからその子の努力、年令の４つの点。年が小さいのに上のクラスへは入れられない。かと言って出来ないのに年が多いからとあんまり上へも入れられない。一人一人４つの点でおよその方向を決めるんです。そしてその方向で私が努力する。生徒にも努力させる。そうすると、子どももその気になって一生懸命やる。私が女学科へ入れた生徒は大抵成績がいいですよ。

ー大体１年位で女学校へ入れますか？

１年ではないですよ。１年位で行くのはよく出来る子で、年もあんまり困らない子。だけど大抵２年、多い時には３年位います。別科が好きで、女学科へ行きたくないという生徒もいて困りました。だけど女学科へ入ってしまったら良かったらしいですよ。でも別科へ帰りたいという子も大分いましたね。私が教えていると、ガラス窓の向うから覗きに来るの。別科へ来れば英語で話が出来るから楽なんでしょうね。ともかく別科で勉強した生徒は他のクラスで勉強した生徒より余計になつかしいらしい。それは日本人が外国で日本の人達と一緒に暮したような気持なのかもしれない。

ー別科がなくなったのはやはり戦争ですか？

17年頃になると戦争になって、帰って来る人がなくなったの。それでもやっぱり30人位いましたかしらねえ。みんなそれぞれのクラスに入れて辞めて来たんです。私、辞める頃盲腸を患ってね、２ケ月ばかり休んだことがあるの。もっと休んで手術しちゃった方がいいって言われたんですけど、休んでいる間に他の先生が教えて下さればいいけどみんな自習。それが１週間やそこらなら自習もいいけどこれじゃ困る。生徒が女学科へ入って困るようじゃしょうがない。どうしても力をつけて女学科へ入れなきゃならないと思って、とうとう手術しないで頑張ったの。

私ね、別科を教えて、初めは嫌だ嫌だなんて言ってミス・ハミルトンに怒りましたけど、やってみて良かったと思いました。私の気持にぴったり。性質にあっていました。別科の子供は嘘、偽りがないの。そんなこというのおかしいですけどね、日本の子どもはこの先生嫌いだなあと思ってもね、先生の前で嫌いだなんて言いませんよ。あなたは今、私の方を向いて話をよく聞いているような顔をしてるけど、他の事を考えていますねって私が言うと、日本の子なら「いいえ」というかもしれないけど、向うの子は「はい、他の事を考えてます」ってちゃーんと言うの。それがすごく気に入ってるんです。だから扱いやすいんです。暴れん坊のところありますけどね、すごく楽しんでやりました。だから学校辞める時にね、あの時は戦争も始まってましたし、校長代理をなさった安井先生が「別科がなくなったから何も学校を辞めることはない。」っておっしゃったけど、別科辞めたらもう嫌だったんですよ。戦争もひどくなってましたしね。家へ帰りますって帰って来ましたけどね。別科はすごく私の気性にあって、楽しんでいたしました。

１９８１年６月８日　於　館山の秋山先生宅
聞き手……中野、芝原、朽木　　採録…加藤

『小　羊』　か　ら

小学科児童組別表

別科児童数	昭和９年12月	20	名
	〃 10年12月	26	〃
	〃 14年３月	33	〃
	〃 15年３月	22	〃

別科生の出身地（第５号、昭和14年３月発行）

ハワイ	８名	オーストラリア	１名
アメリカ	11〃	アフリカ	２〃
カナダ	１〃	マレー半島	１〃
イギリス	４〃	オーストリア	２〃
インド	１〃	ドイツ	２〃
			計33名

樫村幹市先生のメモから

昭和８年、創立50周年を迎えて、東洋英和は名実共に充実した。翌９年４月から、海外から帰り、又は彼の地に留る女児のため、日本語並に日本精神の教育を始める事になった。それは当時アメリカ及カナダ等から転勤移動される人々が、教育、特に女子の教育に悩んでいる人々が多く、いずれのミッション・スクールでも、困っていた。校舎の整備を終えた校長ミス・ハミルトンが、樫村小学科長とも協議の結果、海外のハイ・スクール以上を出ても日本語に不自由で、その生活になれない女子達を特に速成教育によって、それぞれ年令相当の学年に編入する目的を持って、小学科内に別科の制度を始め、秋山春子をその主任にあてた。彼女は英語に巧みで、最も適任者として、自らも特意の職場を誇らしく思ったようである。教場は小学校が１、２階を用い、師範科が３階を使っていたので、そこを教室とした。

昭和９年、青山妙子等４名が第１回生として選ばれた。青山は成績優秀にして、暫くして高等女学校へ進級が許された。時期的にアメリカ等から帰る人達が多かった為であろうか、特別な募集は行なわないのに、次々と聞き伝てで集り、昭和19年迄に180余名を数える程になった。中には高等女学校へは入学が無理と判断し、他の学校へ転身したものも相当数あった。

別科は小学校の管轄にあり、担任の秋山春子は主として英語を通じての国語を教え、図工は関が、倫理、社会、体操は樫村が教えた。教室は師範科とかさなる時は図書室を使用する事もあったが、通常は師範科の教室を用いて行われた。

あとがき　海外帰国子女の教育に関心がもたれている時、先駆となった別科が、戦後に復活されないのは残念です、樫村先生のメモは、私共の問い合わせに対し、御上京の折、短大でお答え下さったものです。（中・高部・中野、沓沢・朽木）

別科生の思い出から

別科の特集に当り、当時別科生だった方々と久し振りにお話をする機会を得、色々エピソードを伺うことができました。

国語は国定教科書を小一から始めるそうです。ある時、「さいた、さいた、さくらが　さいた。」を読まされた一人の生徒が、四本の指で「さ」の字を全部押さえて、「いた、いた、くらが　いた。」と読むので秋山先生が『「さ」はどうしたのですか』とお訊きになると、「この字嫌い」と言ってきかないのだそうです。秋山先生はそれをお叱りにならずに、「嫌いな字でも使えないと困るのではないかしら。おうちに帰って、どうしたら良いか御相談していらっしゃい」とやさしく仰言いました。二日たって、その生徒は「『さ』の字を覚えることにしました」と言って来たそうです。又、ある生徒は、「うちの犬が……を召し上りました」とか、教員室に来て「御半紙を下さい」とか、敬語の使い方はかなり難かしかったようです。

別科を担当することの難かしさは、英語がよく出来なければいけないこと、外国の生活習慣のみを身につけた若者に対して日本人としての考え方や生活の仕方を教えるためには、深い理解と愛情と忍耐と厳しさを求められる、又、別科という一つの科と、小学科、女学科、又、教室が隣接している師範科（現保育科）との関連づけを持ちながら、科として確立させるための組織力、運営力を備えていなければならないので、これを一人で負って立たれた秋山先生に対して、別科生の一人一人は、今も深い敬愛の念と感謝の気持を表わしておられました。

尚、別科の授業料は？と訊きましたら、「兄が大学の授業料よりも高いのだから、大したものだ、と申しておりました」ということでした。

（中野　記）